

ハナ、天国まで届いているか？

おにいちゃんのハナビ

高良健吾 谷村美月 宮崎美子 大杉 漣

早織 尾上寛之 岡本 玲 佐藤隆太 佐々木蔵之介 塩見三省

監督:国本雅広 脚本:西田征史 主題歌:藤井フミヤ「今、君に言っておこう」(Sony Music Associated Records Inc.)

企画:安田昭雄 エグゼクティブプロデューサー:三宅 浩 鈴木 聡 プロデューサー:加藤俊弘/小松方智子 アソシエイトプロデューサー:坂上直行/河野 聡 ラインプロデューサー:秋枝正幸 音楽:小西春菜/近藤由紀夫 撮影:喜久村徳章 照明:才本 輝 録音:渡辺真司
美術:仲崎智治 編集:清水正彦 衣裳:小海綾美 ヘアメイク:酒井夢月 スクリプター:谷 恵子 助監督:伊藤大輔 製作担当:斎藤大輔 キャスティング:斎藤勇司 アシスタントプロデューサー:吉田健人 ポスター撮影:島根佑有子
製作:「おにいちゃんのハナビ」製作委員会(エコー・エント・ハサラ/ケイファクトリー/バンダイビジュアル/ポニーキャニオン/アプレ/ホリ・エージェンシー/ピープル) 制作プロダクション:エネット 宣伝協力:アサラー・ディ・ケイ 特別協力:朝日新聞社 協力:日本映画バンク/片貝映火協会
ノベライズ:「おにいちゃんのハナビ」朝日新聞出版 配給:ゴー・シネマ 宣伝:集舎 ©2010「おにいちゃんのハナビ」製作委員会 2010年/日本/119分/35mm/カラー/1:1.85/ドルビー-SR <http://hanabi-ani.jp/>

一人一人が想いを込めて打ち上げる花火の町の物語



9月25日(土)
ロードショー

前売鑑賞券¥1,300
好評発売中!
(一部劇場を除く)

JR有楽町駅日比谷口前・有楽町ビル内
有楽町スバル座 03(3212)2826

JR新宿駅中央東口 三越裏 武蔵野ビル3階
新宿武蔵野館 03(3354)5670

池袋駅東口・サンシャイン60通り
シネマサンシャイン池袋 03(3982)6388

JR桜木町駅から徒歩1分 TOCみなとみらい6階
横浜ブルク13 045(222)6222

JR川崎駅西口直結・ラゾーナ川崎プラザ5F
109シネマズ川崎 0570(007)109

世界一の花火があがる日、
天国の妹にささげた花火。

おにいちゃんのハナビ

高良健吾 谷村美月 宮崎美子 大杉 漣

早織 尾上寛之 岡本 玲 佐藤隆太 佐々木蔵之介 塩見三省

監督:国本雅広 脚本:西田征史 主題歌:藤井フミヤ「今、君に言っておこう」(Sony Music Associated Records Inc.)

企画:安田昭雄 エグゼクティブプロデューサー:三宅 浩 鈴木 聡 プロデューサー:加藤俊弘/小松方智子 アソシエイトプロデューサー:坂上直行/河野 聡 ラインプロデューサー:秋枝正幸 音楽:小西春菜/近藤由紀夫 撮影:喜久村徳章 照明:才本 輝 録音:渡辺真司
美術:仲崎智治 編集:清水正彦 衣裳:小海綾美 ヘアメイク:酒井夢月 スクリプター:谷 恵子 助監督:伊藤大輔 製作担当:斎藤大輔 キャスティング:斎藤勇司 アシスタントプロデューサー:吉田健人 ポスター撮影:島根佑有子
製作:「おにいちゃんのハナビ」製作委員会(エコー・エント・ハサラ/ケイファクトリー/バンダイビジュアル/ポニーキャニオン/アプレ/ホリ・エージェンシー/ピープル) 制作プロダクション:エネット 宣伝協力:アサラー・ディ・ケイ 特別協力:朝日新聞社 協力:日本映画バンク/片貝映火協会
ノベライズ:「おにいちゃんのハナビ」朝日新聞出版 配給:ゴー・シネマ 宣伝:集舎 ©2010「おにいちゃんのハナビ」製作委員会 2010年/日本/119分/35mm/カラー/1:1.85/ドルビー-SR <http://hanabi-ani.jp/>

この町の花火は、想いととも打ち上がる。

一年に一度、花火に想いを託す雪国の小さな町。 そこに生きた少女と、彼女のために花火を打ち上げた兄との、真実から生まれた物語。



ストーリー

新潟の片貝まつりで花火が打ち上げられる9月9日。高校生の華(はな)が半年の入院生活を終えて自宅に戻ると、兄の太郎がひきこもりになっていた。頭が良くて優しい自慢の兄は、今や妹にさえ背を向けて、2階の自室に閉じこもるようになっていたのだ。両親はなすすべもなくただ見守っているだけだったが、華は昔の兄を取り戻すべく、乱暴なまでの勢いで兄を外へ連れ出そうとする。一緒に街へ買い物に出かけ、アルバイトを見つけ、ついには片貝まつりの成人会に兄を参加させようと集会所にのりこむ華。そんな妹の健気な後押しに勇気付けられた太郎は、新聞配達として働き始め、成人会にも一人で出かけるようになり、次第に心を開いてゆく。しかし、冬も近づいたそんなある日、華が入院してしまう。白血病が再発したのだ。毎日面会に通ううちに、太郎は華にとって花火が幸せの象徴であることを知り、自らある行動を起こすことを決意する。



深い絆で結ばれた兄と妹の感動の物語

2005年の秋に放映されたテレビ・ドキュメンタリーがすべての始まりでした。新潟県中越地震の1年後を見つめるそのドキュメンタリーは、新潟県小千谷市片貝町の片貝まつりが軸となっていました。400年の伝統と世界一の四尺玉花火を誇る片貝まつりは、町民が子供の誕生や成人、還暦などを祝

して、神社に奉納する形で花火を打ち上げます。花火のひとつひとつに人生ドラマがありましたが、そこで紹介されたあるエピソードに、国本雅広監督は心打たれ、ぜひ映画にしよう決意します。それは、成人を迎える兄が、亡き妹のため、一年をかけて準備し、片貝まつりで花火を打ち上げる話でした。

若手実力派、高良健吾と谷村美月の奇跡的な化学反応

病弱な華のため東京から引っ越してきたことで孤独な高校生活を余儀なくされた太郎を演じるのは、出演作が目白押しの活躍を見せる高良健吾。家族にも心を閉ざした青年が妹の声援によって明るさを取り戻していく過程を、繊細に、ときにコミカルに、ときに力強く演じて、演技者としての一層の成長を見せています。そんな太郎をとびきりの笑顔で応援しつづける華を演じるのは、映画にドラマに舞台に活躍の場を広げる谷村美月。病気が再発しても決して弱音を吐かず、兄の変化を喜び、家族が昔のように仲良くなることに

心を砕く、谷村美月が全身で表現するそんな華の優しさと強さが、太郎を、そして観客を勇気づけ、彼女を愛しむ気持ちで満たしています。ラストで溢れる感動の涙は、華へのありがとうの涙であり、これからもきっと頑張っていくよ、の決意の涙にほかなりません。兄妹ならではの絶妙なやりとりで楽しませてくれる2人を支えるのは、両親役の大杉 漣と宮崎美子。ひきこもりの息子と難病の娘を抱える辛い日々、崩れ落ちそうな気持ちをふるいたたせて平静を装う実直な両親を演じて、太郎の成長物語への感動を倍加させています。

藤井フミヤの書き下ろし主題歌 「今、君に言っておこう」

監督は、「診療内科医・涼子」(97年/日本民間放送連盟賞・優秀賞受賞作品)や「瑠璃の島」(05年)など多数のドラマ演出を手がけ、本作で満を持しての映画監督デビューを飾った国本雅広。脚本は、『ガチ☆ボーイ』(08年)や『半分の月がのぼる空』(10年)の西田征史。そしてエンディングでさらなる感動を呼びおこすのは、藤井フミヤの書き下ろし楽曲「今、君に言っておこう」。2007年以来実に3年ぶりの自身による作詞・作曲のこの曲は、本作に感銘を受け、生まれたものです。夜空に大輪の花を咲かせる花火。さまざまな願いや思いを込めて次々に打ち上げられていく花火の壮麗さ、ぱっと咲いて一瞬で散る芸術の粋に、家族の絆が見事に託された本作は、上海万博の公式イベントである「2010上海・日本映画週間」のオープニング作品に選ばれています。



片貝まつり(新潟県小千谷市片貝町)

毎年9月9日・10日に開催される片貝まつりは、浅原神社の秋季例大祭です。片貝花火の起源は、今から400年前の江戸時代初期に遡り、浅原神社へのお賽銭代わりに花火を奉納したことから、花火の打ち上げが始まったと言われています。1891年(明治24年)には片貝で初めて三尺玉が4初打ち上げられ、三尺玉発祥の地となりました。また、1985年(昭和60年)には直径800メートルの大輪を咲かせる四尺玉が打ち上げられ、全国的に有名になるとともに、世界一の花火としてギネスにも認定されました。祭の当日、片貝の町では、浅原神社へ花火の玉を奉納する「玉送り」や、花火打ち上げの成功と無事を祈る「筒引き」など、古式ゆかしい伝統行事がおこなわれ、花火への期待を盛り上げていきます。花火を打ち上げるのは、子供の誕生、成人、結婚、還暦、初孫の誕生、家内安全、商売繁盛など、さまざまな願いを込めた町民たちによるものが主体です。個人や家族単位だけでなく、地元の片貝中学校を卒業と同時に同級生で結成する「会」単位で花火を打ち上げます。その最初の記念碑的な打ち上げが成人会で、以後、還暦まで、人生の節目で会ごとに花火を打ち上げ、絆を強めていきます。ちなみに、成人による大仕掛け花火の奉納が始まったのは、昭和25年のことでした。
(小千谷市公式HP)〈おぢやファンクラブHP〉〈片貝まつり迎賓館HP〉参照

